

春風秋霜

11月号

令和3年11月1日
島田市教育委員会日より
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 たくましさの育成について

エデュコ（教育出版社）9月30日号に『テルマエ・ロマエ』で第3回マンガ大賞や芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞し、東京造形大学客員教授のヤマザキマリさんのインタビュー記事が掲載されていました。

その中で、子供の頃に感受性を育てることが教育の真の目的と話しています。孤独感、何か欲しいという渴望する思いや、多くの本を読む、旅行する、情熱をもって生きている人に会うなどを通して、感受性の数を増やすことが大事と述べています。

日本では猜疑心や疑うことをひどくマイナスにとらえますが、外国では騙されると「騙されたお前が悪い」と言われたり、ずるがしこい人が賞賛されたりすることを紹介しています。また、コロナ禍における誰かが発信してくれるのをみんなが待っている状況や、疑いの気持ちを持たないで情報を受け入れるという思考停止は危険だと指摘しています。

染谷市長は校長会での講話において、子供を守りすぎる教育に疑問を呈しています。例えば、特性のある子どもに関わる時、その子がトラブルを起こさないように先手先手を打って関わり過ぎていないでしょうか。学校、放課後児童クラブ、家庭が同じように関わっていると、子供の自活能力が育つか心配されます。子供が失敗しないように配慮することは、失敗から立ち直る経験を奪うことになるという意見もあるので、配慮のし過ぎには課題があると思います。

ヤマザキマリさんの記事にもあるように、日本と世界の違いを自覚し、世界で活躍できる子供を育てるためには、人に頼らず自分で考え実行する力や自己主張する力を育てなくてはなりません。学習指導要領にある『主体的、対話的で深い学び』を通じて育成する資質・能力と重なることは多いと思います。今後、教育課程の編成が始まると思いますので、子供たちの自立という視点を大切にしたいと思います。

2 インドネシアについて

インドネシアやカンボジアとの交流事業を仲介していただいている中央大学の加藤教授から、『インドネシア 世界最大のイスラムの国』という本を頂きました。この本は、イスラム教と関連させてインドネシアを解説しています。

イスラム教というとテロリストと結び付け、危険な宗教という思いがありましたが、インドネシアにはISに参加するような過激派も少数はいるものの、イスラムの教えを伝統的な文化と融合させた独自のイスラム教が存在していました。

また、インドネシアには地域社会の豊かなつながりが残されており、コロナ禍で食事に困る人たちのために、公的な支援より先に地域住民同士の助け合いが機能しているそうです。モスクにおいて無料の食事や食料の提供が行われたり、地域の裕福な者が生活必需品や食料を個袋に入れて配布したりしているそうです。災害時には寝具なども提供するそうです。これらは、イスラム教信者だけでなく、どの宗教の人でも自由に持ち帰ることがで

きるそうです。

600もの言語があると言われていた多民族国家のインドネシアでは、異なった人がいることは当たり前のことなので、コロナ禍で起きた日本の自粛警察のような動きはなく、互いを認める風土があることをうらやましくも思いました。この本を読み、先入観で判断していた自分を反省しました。

3 You Tube で勉強しています

最近、You Tube で農業関係の動画を見るが多くなりました。長年農業を営んできましたが、経験だけに頼るのではなく、様々な知識を得てその中から新たな挑戦をする楽しさを味わっています。

私は、作物の栽培において、できるだけ減農薬や有機栽培に心掛けていますが、コンパニオンプランツや重曹とサラダ油を使った殺菌剤などは You Tube を見てから始めました。また、腐食酸肥料の効果や、農薬の種類に合わせて展着剤を変える方が良いことも知りました。その他には、食べたアボガドの種の水耕栽培も始め、芽を出すことができました。自分で育てたアボガドの実を収穫できる日を今から楽しみにしています。今後は新たな果樹や野菜にも挑戦してみたいと思っています。



肘かけ椅子

又平 剛 博物館課長

「なぜ山に登るのか？」

登山を始めて10年になるだろうか。低山から登り始め、今では赤石岳や槍ヶ岳、劔岳などの日本アルプスにも登るようになった。

たまに「なぜ山に登るのですか？」と聞かれることがある。単に「山が好き」と言ってしまうえば、それだけの事なのだが、「なぜ登るのか？何のために登るのか？」と考えてみると、はっきりとした答えが出てこない。

登山のイメージは、「疲れる、面倒、危ない」たしかにそのとおり。一步間違えば、「死」にも直結する。

山頂までの道のりは、急登や岩場などいくつもの難所があり、そこを一步ずつ乗り越えていく。マイナス思考になることもあるが、いつしか忘れ、ただただ登ることだけに全集中している。

そして、その頂に立ち壮大な景色を眺めたとき、ここまで自分の力だけで登ってきた達成感と、この自然界で、自分はなんてちっぽけなんだという虚無感が入り交ざる。

何と言えはいいのか、自分にとって登山というのは、自分を見つめ直す「試練」なのかもしれない。しかし、その試練は苦ではなく、試練に「挑み、楽しみ、満足」している。

これからも様々な山に挑み、「試練」を楽しみながら登り続けたいと思います。